

奈良県立高等学校入学者選抜検討委員会 これまでの主な意見やまとめ(概要)

(高等学校の特色化の必要性)

・国が示す令和の日本型教育、これからの時代に必要な力を身に付けさせるための学校教育の在り方を教員一人一人が把握し、あの高校に行けばこんな授業が受けられる、と示すことができればよい。

・地元の高校から大学生となることを目指していけるように、魅力、活力ある高校づくりには賛成。両方叶えていくことは難しいことかもしれないが、必要なことだと考える。いろいろな選択肢が用意されているということは必要。

・入試制度を検討するに当たっては、特色ある高校、魅力ある高校をつくることと表裏の関係であると思う。また、県内の通学に関わる距離の問題に対して、遠隔授業の活用が必要となると考える。

・遠隔教育については、新しい入試制度に併せて議論をする必要があると思う。1人1台端末で当たり前に使われるようになれば、入ってからの学びの多様化にもつながると考える。

(高等学校の特色化と中学生の意識)

・特色選抜がはじまったときには、子どもたちの様子をみていると、行きたい学校という選択もあるが、少しでも早く決めたいという思いが強かったと思う。ただ、近年は、行ける学校や早く決まる学校よりも、行きたい学校という認識はある程度定着してきている。

・奈良県の子どもたちのアンケートでは、普通科を希望する子が80%ぐらいとなっている。特色選抜はいいと思うが、中学生で夢があるか、という点は難しいと考えている。特色を考えた高校選択は、子どもたちには難しいのではないかと思う。普通科を増やしてほしいという声が多い。

・中学校卒業の段階で自分の将来をしっかりと見据えられている子どもたちがどれほどいるか。高等学校の特色をしっかりと学ぶとともに、自分の分析をしたり、将来を考えられるような機会を持たせたりしていかなければならないと思う。

・奈良県の保護者の意識が、奈良、畝傍、郡山に行くことが1つのステータスになっているのではないかと思う。地元の高校よりもそれらの高校を選ぶ、そのような意識が強い現状があ

るのでは。高校入試は、小学校段階からも、特に保護者が注目している課題。

・特色選抜のねらいが実現できているかどうかを論ずるにはまず中学校側で進路指導が実際どのように行われているかきちっと把握した上でしか、ねらいが実現できているかどうかからないと思うが、ここ2年間定員が割れているので、そういう意味ではねらいが実現できていないとなるのではないか。

・特色選抜の制度が始まった段階では、明らかに少しでも早く進路を決めたいという生徒が多く、どの学校のコースもオーバーしている状況だったが、近年は定員を割ったり、偏りがあつたりするような状況である。志望する生徒がある程度集約されてきたということと、中学校段階で将来を見据え、進路を決めて実業コースに入るという指導が不足しているのではないか。

・子どもたちの現状を見ると、中学校でのキャリア教育の中で職業に対する興味・関心は高めるものの、卒業段階では幅広く勉強できる高校を終えたいという傾向がある。

・中学生たちが専門学科を積極的に選びにくいという現状。とりあえず普通科というところをもう少し洗い出す必要がある。別の県で、例えば商業高校で大学進学を軸に置き商学部とか経済学部とかの推薦をねらっている高校があつたり、農業高校でスーパーサイエンスハイスクールというのあつたりするわけなので、特に高等学校の専門学科における教育の工夫を見通しながら考えていただきたい。

(公立・私立、県内・県外の選択)

・県内の高校において、上位の5校ぐらいの競争率が高い。学力の高い生徒が上位の県立高校の受検に失敗をしたとき、県内から県外へ行ってしまふ状況であると思う。県内に残って県内の教育を受けることにつながる体制が弱いと思う。

・生徒数も減っているので、私立の受検の合格者が多くなった印象がある。早くに合格を出されると私立に流れていってしまう。二次募集で試験を受ける普通科高校の子どもたちは非常に少なく、二次募集でも定員が割れてしまっているということが起こっている。何とか奈良県内で、行きたい学校に行ける方法はないかと思う。

・前回の再編で行ける学校から行きたい学校へとなったが、高等学校もそのような学校がつくれているのかということを考えていかなければならない。私学での実質授業料無償化の制度ができてから、公立は少々無理なところでも挑戦し、だめな場合は大阪・京都の私学に、という進路指導が行われているのではないかと思う。

・奈良県の子どもは出来るだけ奈良の高校でしっかりと18歳まで育てるということは非常に大事なことで、なにも大阪や京都の私立に行かなくていい、やはり県として18まで責任を持って教育に関わっていくんだという姿勢が大事だと思う。小中高連携を行っている地域もある。単に教育改革を越えて、街作りとして出来ることだろうと思う。

(入学者選抜時における成績評価の在り方)

・中教審答申が期待している学力観を入学者選抜にどのように具体化していくか。あまり入試を利用するのはどうか、ということもあるが、中学校以下の教育をしっかりと評価して、高校に入ってからの学力、資質・能力というものをしっかりと評価できるようになるといい。

・奈良県の調査書は、2年3年が1：2となっている。1年からはじまり、そろそろ頑張りたいという2年生になり、3年生で更に頑張る、ホップ・ステップ・ジャンプのようになっているのは、昔は1年生の成績も調査書に入っていた時代もあったということを見ると、よく工夫された制度だと思う。

(推薦入試)

・推薦選抜を半分以上の都道府県が採用しているということは、推薦選抜は意味があるのではないかと考えるが、推薦という形よりも内申に加点をするなど、今の特色を幅広くしたぐらいがよいのではないかと思う。

・地域推薦という形の入試は、地域を守っていくということも含めて、地域の子どもの地域の高校に進学してほしいという1つの考え方であると思う。その視点で推薦選抜があるとなると、大変望ましいと考える。

・かつての地域連携で、中学校での学習面に気持ちが向かない悩みというものも聞いたことがある。学習への意欲をどのように保つかという不安な部分はあるが、地域の中学校から高校に進むというのは非常に意味のあることである。

・推薦入試について、近年、国立大学においては、学習指導要領の改訂に伴って、思考力・判断力・表現力が重視されているところである。学力検査では測れない力を推薦入試で判定するという形で考え、大学入試センターもそのように移行していることも考慮していくとよい。

・推薦入試については、校長推薦が大変悩ましいところと考えており、複数の子どもたちが推薦を希望したときに、中学校の校長が判断できるのか。希望をすればすべて推薦をするという形に結局はなってしまうのではないかと。

(受検機会)

・専門高校の校長の意見としては、特色選抜は絶対必要である、これがなくなれば実業高校は立ちゆかないという意見の一方で、逆になくしてもよいとの意見があるのも事実。なくしてよいという理由として共通しているのが、3学期の授業時間の確保である。

・ある商業高校だと7割5分が大学進学になっている。そういう学校は普通科と一緒に試験をしても子どもが来てくれるのではないかと思うので、入試は1回でよいのではないか。

・1回の試験でもいいので、いくつか自分で学校を選ぶことができるのであればよいのではないか。複数校志願は1つの方法かと考える。

・受検機会ということ言うと、シンプルイズベストかと思う。可能な限り1回の入試でうまくいくならその方がいいだろうと思うし、その第一志望、第二志望というのも制度的に難しいところはあると思うが、実現可能であれば検討していただければと思う。

(選抜方法)

・検査の内容によって将来的には、マークシートやC B Tの導入も検討すべきではないか。選抜を1回にすれば、受検教科数も含め、その1回の試験を多様にする必要があるのでは。

・基本的な姿勢として、一人も取り残さずに、それぞれの生徒に合った、その生徒が入りたい学校で学べるチャンスを与えるものであってほしい。一人も取り残さない制度づくりが大事。

(多様な受け入れ)

・発達障害のある生徒について、高校に入って伸びる生徒もいるが、一方でそうとはいえない生徒もいる。合格した生徒をしっかりと見てあげられる体制をお願いしたい。

・今回、知的障害のある生徒を対象とした山辺高校の自立支援農業科が設定されたことについては、通学距離が長いのは気になるが、農業で体を動かして自立していくのは素晴らしいことだと思う。

・帰国生徒等特例措置については、中学3年生の11月段階で日本語が全くといった生徒を3月の入試段階で日本語で作文が書けるように指導し、帰国生徒等特例措置対象の高校に入学につなげた経験がある。授業の取り出しの対応等、高校で丁寧に指導され卒業し、就職することができた。この制度がなければどうなっていたのだろうかと思う。

・全国募集については、十津川高校についてもっとPRをして、寮のあることを生かせればと思う。その他の寮についても、県内の生徒の対象地域の拡大等、寮の在り方、魅力化を具体的に進められれば南部東部の生徒が増えることにつながるのでは。

・限定的なクラブに限ってスタートした全国募集の制度だが、専門の先生による指導によって魅力化を図ること、南部東部という枠組みの中でどのように広げるかについて検討し、関心のある生徒を集められればよいのでは。

・様々な障害を持った生徒の受け入れについては、これまでの状況をみて緊急に対応しなければいけないということではないようなので、引き続き、本人の学ぶ機会をしっかりと保障していくということが重要だと考える。また、教育委員会と学校とが連携をとって、一人一人の受検者の事情をしっかりと受け止めて学びを保障できる体制づくりを整え、個別の先生に負担のいかないようお願いしたい。

・特別支援学級で学んだ子たちの新たな選択肢として、農業というところに具体化した制度が作られた。このような生徒たちの才能、個性が、これからの農業に発揮できるようなカリキュラムとなれば新しい高校の課程修了、学校制度の履修の在り方に一石を投じることになると考える。